

## 同性愛者としてのダンブルドアとイギリス同性愛の歴史

中島 亜美

### 序論

『ハリー・ポッター』シリーズはイギリス人作家 J.K.ローリングによって随筆された小説であり、1997 年から 2007 年にかけて 7 作品が発表、2001 年から 2011 年にかけて 7 作品全てが映画化もされたことでイギリスだけではなく世界的な大ヒットシリーズとなった。また 2016 年にはシリーズのスピンオフとして、『ファンタスティック・ビースト』シリーズが公開された。このように長年愛される作品であるが、2007 年ローリングが『ハリー・ポッターと死の秘宝』の発表後、シリーズの中心キャラクターであるアルバス・ダンブルドアがゲイであることを明かした (Hetter)。

そこで本稿では、ダンブルドアを取り巻く描写の同性愛的な解釈への考察を行いながら、そこにはシリーズの主な舞台であるイギリスが歩んだ同性愛の歴史とどのような関連があるのかについて検討していきたい。1 章ではまず、『ファンタスティック・ビースト』シリーズの時代設定は 1926 年から 1945 年、『ハリー・ポッター』シリーズは 1980 年から 2000 年ということから、イギリスの同性愛に関する歴史を 18 世紀、19 世紀、20 世紀と順に追っていく。そして 2 章では『ファンタスティック・ビースト』シリーズにおけるダンブルドアの同性愛者としての描写へ考察をしながら、イギリス同性愛の歴史とどのような関連があるか考えていく。最後に 3 章では、『ハリー・ポッター』シリーズでのダンブルドアの立ち位置をクィア視点で読み解き、歴史との関連を考察する。

最終的に本稿を通して、『ハリー・ポッター』また『ファンタスティック・ビースト』シリーズを児童向けのファンタジー作品としてではなく、イギリスが歩んできた同性愛者への歴史的偏見や捉え方が反映されたクィア的な作品としての、多様な解釈への発展を期待したい。

## 第1章 イギリスの同性愛の歴史

英国では2004年に同性カップルに対して、結婚している異性カップルと同様の法的・金銭的保護を認めるシビル・パートナーシップ制度が制定された（「異性カップルもシビル・パートナーシップ制度を選べるように 英国」）。これはイギリスの同性愛者たちにとって大きな転機となった出来事だ。そして2013年にイングランドとウェールズで、2014年にはスコットランドで同性婚が合法化された（「異性カップルもシビル・パートナーシップ制度を選べるように 英国」）。さらに2020年に北アイルランドでも法制化されたことで（福井 57）、イギリス全土で同性同士での結婚が法的に認められたのである。しかしこれまで、イギリス社会では法律や偏見で同性愛を厳格に取り締まっていた時代が長かった。それにより同性愛者たちは罪の意識を抱えながら生きていた。そして本稿で扱う作品『ファンタスティック・ビースト』シリーズの時代設定は、第1作目『ファンタスティック・ビーストと魔法使いの旅』の1926年から、現在予定されている第5作目の1945年である。また『ハリー・ポッター』シリーズは1980年から2000年。そこでこの第1章では18世紀、19世紀、そして『ファンタスティック・ビースト』、『ハリー・ポッター』シリーズの主な時代設定である20世紀のイギリス同性愛の歴史に焦点を当てていきたい。それらの時代にイギリス歩んだ歴史を辿っていくことで、これまで同性愛をどのように捉えていたのか、また捉え方は時代と共にどのように変化したのか明らかにしていく。

### 18世紀以前の同性愛

まず18世紀について述べる前に、それ以前の時代同性愛がどのように捉えられていたかについて触れておく。後にも述べていくが、同性愛という存在や定義は20世紀に入るまで、明確ではない時代が続いていた。しかしそのような中でも男色と呼ばれる、男性同士の性的関係は存在しており、旧約聖書では男色や獣姦などの自然に反した性行為をソドミー（sodomy）と記されている（ソドミー）。このソドミーという言葉をもとにイギリスでは1533年にソドミー法が成立し、男性同士の性行為が法的に禁止になった（北丸 2022）。そして男色が法律で規制されていた背景は、キリスト教の影響が大きい。新約聖書、ローマの使徒への手紙一章27節では、男性同士で関係を持った場合について、「女との自然な関係を捨てて、互いに情欲を燃やし、男どうしで恥ずべきことを行い、その迷った行いの当然の報いを身に受けています」と記されている。このように異性愛主義のキリスト教にとって同性同士の関係は、何かに血迷った結果行ってしまう行為または、道を踏み外してしまう人という認識があった。キリスト教

の教えが欧米諸国には根強く浸透していたため、イギリスでも 18 世紀以前から同性愛とは神聖なものではなく、墮落した人間という罪の意識が強かったと考える。

### 18 世紀 モリーハウスでの出会い

18 世紀のイギリスには、テムズ川北岸の地域全体にわたってモリーハウスという建物が存在した（ブレイ 143）。このモリーハウスは男性たち、また男色者と呼ばれる人々の密会の場であり、18 世紀イギリスと同性愛を分析していくうえでは重要な点である。法律や宗教組織により同性愛が規制されモリーハウスで同性愛者たちが迫害されるなかで、18 世紀の同性愛は性的に落ちぶれた状態として社会から捉えられていた。しかし同時に同性愛者たちにとってはモリーハウスは特別な空間であり、本当の自分を見出す場であったといえる。

モリーハウスでは、酒や食事が提供され人々が談笑を楽しむ店としてだけではなく、男性同士の性行為が日常的に行われている店であった（ブレイ 142-143）。そして同性愛者たちが出入りを繰り返す中で、そこを猥褻な空間であるとして、決して良く思わず厳しく取り締まる者たちがいた。それは風紀改善協会の者たちである。風紀改善協会についてはブレイによると、「男色者や売春婦を迫害する運動に重要な役割を果たした活動的な宗教組織」と述べられている。先述したように、キリスト教では男色が禁じられていた。さらにイギリスでは独自にソドミー法でも同性同士の行為を罪としていた。このように、男性同士で性行為を行うということに関して 18 世紀以前から独自の法律も存在するほど、特に厳しい態度をとっていたイギリス社会では、同性愛者が集まるモリーハウスは決して許されなかった。またイギリスの法律の基礎となったのはキリスト教会的な偏見であるため（立石 5）、宗教組織である風紀改善協会にとっては、同性同士で反自然的な行為が行われているモリーハウス、そして同性愛者たちを厳しく取り締まっていた。

またブレイは当時の同性愛の捉え方について次のように述べている。

当時の同性愛に対する姿勢と淫蕩全体に対する姿勢との間には、明確な一線を引くことはできない。同性愛はそのようなものとして、少なくとも理論的には誰もが屈しやすい誘惑であって、「人間本来の墮落した邪悪な性格」が陥りやすい悪弊であった。（ブレイ 52）

同性愛は男性同士という反自然さが許されていなかったのは勿論だが、新約聖書でも男性同士の行為が迷った行いだと記されていたように、人間としての墮落という解釈

が18世紀にも残っていた。そして同時に、このように道を踏み外す可能性というのは誰にでもあるという捉え方があった。そしてこの捉え方に基づいて、モリーハウスという誘惑に負けた人間が集まり性的に墮落した空間の秩序を、警察や風紀改善協会が取り締まっていた。

しかし、そのような厳しい目を向けられていた同性愛者であったが、モリーハウスは彼らにとって特別な空間であった（ブレイ 143）。それは家族、友人、学校などでは見せることのできない、素の自分でいられる空間であったということである。ブレイはモリーハウスで、性的欲望を満たす以外で得られたものについて、このように述べている。

まず第一に、性的交渉があろうとなかろうと、そこでは、もうかれらは孤立することはなかった。友情ということももちろん大切であるが、そこにはただの友情以上の意味があった。それはある種の攻撃的でしぶとい文化として、一人ひとりに心の支えを与えたのである。（ブレイ 161）

つまりただ単にモリーハウスが、墮落したといわれる男性たちが性的欲望を満たすためだけに通っていた場所とは言えないことがわかる。同性愛者として世間から隠れるという同じ境遇から、仲間意識を持ち安心して親密な関係を築けた場所であった。また警察や宗教組織による規制を受けずに、性別という枠組みは関係なく友情もしくは愛を、モリーハウスという家や学校などとは異なる空間で育んでいたのだろうと考察する。

以上から、18世紀のイギリス社会にとって同性愛とは、誘惑に負けた結果陥ってしまう性的な墮落という捉えられ方であった。しかし同性愛者たちにとっては、同性愛という罪の意識を抱えながらもその孤独さから解放される特別な空間として、モリーハウスを見出していた。

## 19世紀 若い世代を墮落させる同性愛者

19世紀に入ると同性愛に対する捉え方は、売春問題が大きく影響するようになる。同性愛者が、誘惑に負けた人という捉え方だけではなく、社会問題を背景とした新たな法律や事件によって少年また青年を墮落させる者、また周囲の人間にも悪い影響を与える者として捉えられるようになっていく。

まず、新たな法律とは1886年施行の刑法改正法第一部の第十一条、ラブシェール修正条項である。男性同士の親密な関係やあらゆる行為は著しい猥褻な行為であると、

軽犯罪として取り締まるものであり、この親密な関係については公的であっても私的なものであってもラブシュール修正条項の対象になっていた（野田 2004 219）。ラブシュール修正条項以前、同性愛を取り締まる法律は先述した 1533 年ソドミー法であった。また 1861 年ソドミー法の刑内容が死刑から終身刑へと減刑されるも、処罰の対象はあくまで男性同士の行為自体であった（立石 11）。対してラブシュール修正条項は親密な関係も軽犯罪として扱うようになったため、処罰の対象の範囲が広がった。これは男性同士の関係性を認めないという、19 世紀社会全体の同性愛に対する厳しい姿勢が表れていると考える。

ではなぜラブシュール修正条項ではここまで厳しく男性同士の関係を認めないのか。それは社会純潔運動による、売春からの保護活動が背景として影響している（野田 2004 220）。社会純潔活動という運動について、また特徴について野田（2004）は以下のように述べている。

福音主義と呼ばれるキリスト教の一派の人びとによって推し進められたものであり、その特徴は法や警察などの直接的な国家権力によって「社会問題」を解決に導き、社会の「純潔」を維持しようとしたことにある。（野田 2004 220）

そしてここでいう社会問題というのが、19 世紀から 20 世紀にかけて起こった、売春問題である。特にイギリスのロンドンでは、王室関係者の男性が男娼宿に通っていたスキャンダル<sup>1</sup>が公になったことで、上層階級の成人男性による少年売春が問題となった（野田 2004 220）。また後に述べるが、オスカー・ワイルド事件での青年への猥褻な行為やこのような売春が多数発覚したことで、上層階級の男性による若い男性への性的墮落から守る必要性が生まれ、処罰の範囲が広がったラブシュール修正条項では、成人と青年という男性同士の親密な関係も過剰な生を営むものとして、猥褻な行為だと定義された（野田 2004 224-225）。つまり 19 世紀同性愛に対しては、同性へ惹かれる現象を引き起こすという問題ではなく、主に上層階級男性の性的欲望によって少年や若い男性を墮落させる点を問題視されたといえる。そして成人した同性愛者、特に地位が高く裕福な男性には、性的な危険性があるという捉え方の変化が生まれた。故にラブシュール修正条項では、親密な関係の先にある売春という性的墮落を阻止させるために、男性同士の関係をより厳しく取り締まっていたのだ。

また、社会純潔活動がキリスト教の一派の人々が推し進めた活動であるという点から、19 世紀においてもイギリス社会の同性愛とヴィクトリア朝の価値観はなかなか切

り離されないということが分かる。イギリスが同性愛に対して厳しい規制をしていた背景は、ヴィクトリア朝の宗教的価値観が根強いという点については先述した。そして18世紀同性愛＝墮落した状態という捉え方から、19世紀同性愛＝売春、成人男性の性的墮落という新たな捉え方へと変化したのは、売春という社会問題に対してキリスト教の一派という宗教関係組織が介入した点も影響しているだろう。社会や人々が同性愛について捉える際、イギリス社会に根強く残る宗教の価値観が反映され、男性同士の関係は売春に繋がるという認識を加速させた。このように19世紀においてもイギリス社会の同性愛とヴィクトリア朝の価値観との関係はまだまだ根強いということが、ラブシュール修正条項成立の背景からもいえるだろう。

そして同性愛は墮落の道へ導くという考え方をさらに、イギリス社会全体に浸透させることになったのは、オスカー・ワイルド事件も大きく影響している。この事件は、1895年オスカー・ワイルド<sup>2</sup>が刑法改正法第十一条、男同士の著しい猥褻行為を犯し逮捕された事件（野田 2005 127）である。そしてワイルドと親密な関係があったのが16歳年下の青年であったため、裁判では同性愛という概念への争いではなく、ワイルドが日常的に青年とのわいせつな行為を行っていたという、墮落した彼の人格に論点を置かれた（野田 2005 136）。野田（2005）は当時の裁判官の狙いについて次のように述べている。

カーソンの狙いは、ワイルドが金銭で若い男性を買っている、つまり彼らに売春をさせているということ、実際にそのような行為が行われたという証拠なしに人々の心に印象付けることであった。その際に彼が利用したのは、彼の貴族的で退廃的な生の形態であり、ワイルドという人物の墮落した性質そのものであった。（野田 2005 136）

このように、裁判ではワイルドの性的墮落を強調された。また上層階級の成人男性が若い男性を買っている行為への指摘により、オスカー・ワイルドという人物自体が、成人男性の性的な墮落という19世紀の同性愛の捉え方そのものを反映させられていたと考える。そしてこのようにオスカー・ワイルド事件は、19世紀の同性愛は若い男性を墮落へ導くものであると、イギリス社会全体に強く印象付けられた。

刑法改正法のラブシュール修正条項の成立とオスカー・ワイルド事件によって、19世紀イギリス社会で同性愛は性的に落ちぶれた大人が若い男性を買うという売春行為の一つであり、猥褻な行為をもって健全な男性を墮落した道へ導くものとして捉えられていたことが分かった。しかしその一方で、新たな法律で縛られることや、社会か

らの新たな偏見が生まれたということは、イギリス社会の中で同性愛が光を浴び始めたという解釈もできると考える。これまで宗教組織や警察などによって日が当たることを避けるように迫害されていたが、ラブシェール修正条項の成立や、有名な劇作家オスカー・ワイルドが投獄されたことで、同性愛という概念が公に登場した。当時同性愛の定義がまだまだ明確ではないものの、同性愛が可視化され、社会に浸透していく流れが19世紀後半につくられたといえるだろう。

## 20世紀 同性愛者の誕生

最後に20世紀の、イギリスの同性愛の捉え方について分析していきたい。20世紀という世紀転換期に入ると、同性愛という概念がようやく明確になりはじめ、同性愛の脱犯罪化にもつながっていく。これにより20世紀イギリス社会では同性愛に対して、犯罪という意識は薄れていく。しかし同性愛に対する罪の意識は薄れたと同時に、異性愛者と同性愛者の間に他者的な線引きが明確になった。

まず同性愛の性科学的な認識について述べていく。19世紀ラブシェール修正条項は処罰の対象が曖昧であるために、あらゆる関係の男性たちが例外なく厳しく取り締まられた。その結果本来の、売春という社会問題解決のための法律ではなく、同性愛者を無条件に社会から切り離すものに変化した(野田 2011 207)。野田(2011 207)は、性科学者の関係者のひとりであるエドワード・カーペンターの著作『性愛と自由社会におけるその位置』(1894年)では、肉体への無節操な欲望と同性愛者の明確な区別への必要性の強調がされていると指摘している。そしてこうした問題による法改正の動きと共に、カーペンターをはじめとする性科学者たち<sup>3</sup>は同性愛者として生きる人々を解放するため男性同士の関係について以下のように提示した。

既存の道徳の問題の枠内では把握できない、「生得的に同性へ惹かれる」という現象を指摘し、その根拠を、医学的知識を介して個別の身体内部に占めることによって、「同性愛者」という身体を構築した。(野田 2011 208)

このように性科学的に同性愛が認識されたことで、男性同士で関係を持つ人＝性的墮落者、売春ではなく、同性愛者という性的指向としてのあらたなカテゴリーに位置することができた。そして20世紀初期のイギリス社会に、男性同士の恋愛関係＝同性愛という概念が浸透し始める。

次に同性愛者自身による、カミングアウトについて述べていきたい。1954年、男同士の猥褻な行為があったとして数名が逮捕され裁判にかけられた事件として、モンタ

ギュー事件がある（野田 2006 66）。この事件で注目したいのは、逮捕されたピーターワイルド・ブラッドという人物が、裁判で自身は同性愛者であると断言したという点であり、裁判など公の場で同性愛について肯定的に発言することは彼が初であった（野田 2011 208-209）。そしてこの発言には、性科学的に認識され社会に浸透し始めた同性愛の存在を社会全体へ主張すると同時に（野田 2006 67）、同性愛者が自分自身の性的マイノリティと向きあい自認していき始めたのではないかと考える。医学の知識を用いて同性に惹かれる現象を指摘されたことで自分自身は性的に墮落した者ではないと意識し始め、自身の性自認を隠す必要はなくなった。このような同性愛者の行動の始まりとして、ブラッドの裁判でのカミングアウトが挙げられるのではないか。

しかし、性科学により同性愛が認識されブラッドの発言のように同性愛者が性自認を明らかにしはじめたが、これは社会によって他者的な線引きを引かれ、普通とは異なる存在として捉えられることにも影響してしまう。ウィークスによると、性科学によって多様性のカテゴリーが複雑化したことによる同性愛者の位置づけについて、「同性愛者は独自の欲望、独自のアイデンティティをもった特殊な人間とみなされた」と述べている。またモンタギュー事件が起き、ワイルドのカミングアウトがあった1950年代について、同じくウィークスは、「クリアな人々が異性愛の世界に溶け込んでいた時代から、同性愛が異性愛と明確に分離される時代へと変わったのだ」とも述べている。このように、同性愛の存在が認められたことで、同性に惹かれる性的指向をもつ人を同性愛者と位置付けられるようになったが、この20世紀の転機は、同性愛者は異性愛者とは異なる独自の人間であるという認識が生まれ、二者の間には境界線が存在するように変化した。

これらから、19世紀人間が陥る誘惑や売春としての捉え方をしていた同性愛が、20世紀イギリス社会では同性愛が性的アイデンティティの一つとして捉えられ始めた。しかし、それと同時に同性愛者は特殊な人間であり、異性愛者とは交わらない他者的な存在だと捉えられるようになった。

これまで第1章としてイギリスが歩んできた同性愛の歴史や、社会がどのように同性愛をとらえたのかについて述べてきた。そして主に18世紀、19世紀、20世紀に焦点を当ててきた。18世紀以前から男色が聖書で禁じられた存在であったこともあり、18世紀では犯罪という罪の意識や、誰もが陥る誘惑として捉えられた。そのような認識があるなかでも、同性愛者が集まる場としてモリーハウスが存在し、男性たちは自分と同じ悩みや境遇の仲間を見つけていた。そして19世紀では売春という社会問題を

背景に、成人した男性、特に上流階層の男性が少年を買い猥褻な行為を行うという捉え方に変化していく。しかし同性愛＝売春という認識により、あらゆる男性の関係がより厳しく規制されていくが、同時に売春やワイルド事件を通して、19世紀後半では同性愛が社会の中で注目され始める。そして20世紀になると医療知識を用いて性科学的に、同性愛とは同性への性的指向として捉えられるようになった。また性科学的認識と共に、同性愛者自身のカミングアウトが、同性愛＝人間の墮落、売春などというこれまでの捉え方を引き離すことへ影響をもたらしたと考える。しかし同時に、同性愛者を他者的に線引きしていた動きがあった。そして次の第2章では、1章で述べた各時代での捉え方や社会の動きが、『ファンタスティック・ビースト』シリーズの内容や同性愛描写と、どのような関連があるのか考えていきたい。

## 第2章 『ファンタスティック・ビースト』のダンブルドアとイギリス同性愛の歴史との関係

『ハリー・ポッター』シリーズそして『ファンタスティック・ビースト』シリーズの作者である J.K.ローリングは、2007 年にダンブルドアはゲイであると発言をしたことで、ファンや世間の間ではダンブルドアの性的指向や、物語のジェンダー的な視点での解釈について話題になった（板倉 26）。そして『ハリー・ポッター』のスピンオフ作品である、『ファンタスティック・ビーストとダンブルドアの秘密』の冒頭には次のようなシーンがある。

ダンブルドア. 君の行動はまともじゃない。  
グリンデルバルド. そうしようと、二人で言ったことだ。  
ダンブルドア. 若気の至りだ。私は ——  
グリンデルバルド. —— 誓った。私に対して。お互いに対して。  
ダンブルドア. いや、賛同した理由 は ——  
グリンデルバルド. 理由は？  
ダンブルドア. 君を愛していた。  
二人はじっと見つめあう。ダンブルドアがまた目をそらす。  
(ローリング クロブス 8-9)

このようにシリーズ3作目にして、また『ハリー・ポッター』シリーズでも明らかにされなかった、ダンブルドアが同性愛者であることがはじめて示唆された。よってこの第2章では、『ファンタスティック・ビースト』シリーズにおけるダンブルドアの描かれ方は、イギリス同性愛の歴史とどのような関係があるのかについて考察していきたい。

### 同性愛に対する消極的な態度

まず、はじめに同性愛に対する態度を表すシーンについて考察していきたい。それはダンブルドアと、『ファンタスティック・ビースト』シリーズの主人公である、ニュート・スカマンダーと、ニュートの兄であるテセウスの3人が、血の誓い<sup>4</sup>について話すシーンである。

テセウス. 何にとりつかれれば、そんなものが作れるのか、お聞きしてもよいですか？

ダンブルドア、愛、傲慢、純真さ。どの毒でも好きなものを選んでくれ。我々は若く、世界を変えようとしていた。この誓いは、必ずそうするという保証だった。どちらかが心変わりしても。

テセウス、あなたが彼と戦ったらどうなりますか？

ニュートは期待するようにダンブルドアを見るが、ダンブルドアは小瓶を見つめたまま無言。

(ローリング クローブス 37)

ここで注目したいのは、このシーン以降ニュートとテセウスは、ダンブルドアにグリーンデルバルトとの関係について追及をしなかったという点だ。これは 20 世紀初めのイギリス社会が同性愛に対して消極的な態度をとっていたことが反映されているのではないかと考える。

ニュートをはじめとした他のキャラクターたちが、ダンブルドアにグリーンデルバルトとの関係について追及をしないという点は先述したシーンの他にも、実は作品全体を通していえることである。ダンブルドアとグリーンデルバルトの関係には、友情以上の感情があったことが初めて明らかになった作品であり、物語も二人の関係を中心に進んでいく。しかしダンブルドアはグリーンデルバルトに恋心を抱いていたという話題について、どのキャラクターも触れるような描写はなく、グリーンデルバルトの支配から世界を救うことに焦点が置かれている。これはまるで、同性愛に対して触れてはいけないというような扱いをしているようにも考えられる。

1 章で先述したように、19 世紀の終わりから 20 世紀初期にかけて同性愛という概念が性科学的に認識され、1930 年代には同性愛の普及が始まった(野田 2006 66)。しかし先述に加えて、1950 年代まで同性愛者自身のほとんどが、ホモセクシュアルという言葉聞いたことがなかったというほど、19 世紀末から 20 世紀半ばまでの時代は、同性愛に対してまだまだ消極的であったという指摘もある(ブレディ 70)。つまり同性愛という存在自体は普及し始めたものの 1930 年代から 50 年代という時代は、まだ実際には社会や人々にとって同性愛とは、犯罪や性的墮落という認識から性的指向のひとつという新たな認識へ変化する途中であったともいえるだろう。

そして『ダンブルドアの秘密』の時代設定は 1930 年代である。そのため、『ダンブルドアの秘密』で描かれた社会は、同性愛に対して徐々に認識が始まっている 30 年代のイギリス社会と重ねることができる。つまりダンブルドアがグリーンデルバルトに対して恋をしていたことを示唆するセリフや彼らの過去に対して、ニュートやテセウスが追及しなかった姿は、同性愛の普及は始まるも認識や受け入れには消極的な姿勢であった

20 世紀初期から半ばのイギリス社会を表現していると考察する。そして同性愛に対して消極的な捉え方をしている描写は、ニュートやテセウスなどという異性愛者側のキャラクターだけではない。次に当事者である同性愛者本人が男性へ惹かれることを、どのように捉えていたかが表われるシーンについて述べていきたい。

### 同性愛者としての孤独

『ダンブルドアの秘密』では、同性愛者本人が感じる孤独さを表現しているシーンが作品には描かれている。それはダンブルドアとグリンドバルト二人の空間でのシーンであり、ここでは同性愛者として異性愛主義の世界で生きていく孤独さを示唆していると考えられる。

物語のクライマックスであり、グリンドバルトとダンブルドアが直接的に対決するシーンで「この先、誰が君を愛してくれる、ダンブルドア？」（ローリング クロウブス 260）、また「君は孤独だ」（ローリング クロウブス 260）と述べる描写がある。これはグリンドバルトがダンブルドアの気持ちを惑わせるための煽るような表現だ。しかし同性愛の歴史と関連付けて考えると、この描写は 20 世紀初期イギリスの同性愛者が孤立している様子の表現だという解釈ができるのではないか。20 世紀半ばイギリス社会で同性愛と異性愛の明確な分離が生まれた（ウィークス 2005）ことについては 1 章で指摘した。つまり性的なカテゴリー化が進んだ 20 世紀イギリスの歴史的背景が、作品内で描かれるダンブルドアの孤独さを同性愛者としての孤独として解釈できることへ影響していると考えられる。

このように、ダンブルドアの孤独さをグリンドバルトが示唆していたが、実際にこの後にダンブルドアと他のキャラクターが明確に区別されている描写が登場することで、同性愛者の孤独さがより強調されることになる。よって次からは、性的指向による線引きが考えられるシーンについて述べていく。

### 同性愛者としての他者的な線引き

『ダンブルドアの秘密』では、グリンドバルトとの対決を終えて物語の最後に、マグル<sup>5</sup>であるジェイコブ・コワルスキーと、魔女のクイニー・ゴールドスタインの結婚式が描かれる。そこで注目したいのは、ダンブルドアが彼らの結婚式の様子を外から見守る様子であり、その様子は 20 世紀半ば以降同性愛者が異性愛者とは異なる存在として他者的な線引きをされた歴史を表現しているのではないか。

ジェイコブとクイニーの結婚式の様子はまず、次のように描かれる。

いろいろな人がじえいこぶの店に出入りしている 罫線 罫線 マグルも魔法使いも。ジェイこぶのウェディング・ケーキが、再び結ばれた花嫁、花婿をトップに飾って、今や誇らしげに置かれている。(ローリング クロウブス 268)

そしてニュートやクイニーの姉であるティナ、テセウスなど出入りしているなかで、一人外から様子を見守る人物がいる。「それからニュートは通りの向こうを見て、バス停のベンチにダンブルドアが座っているのを見る。ニュートは雪道を横切り、ベンチの前に立つ」(ローリング クロウブス 274-275)とあるように、ダンブルドアだけが、結婚式を執り行うジェイコブのパン屋の外にいるのだ。そしてこのシーンでは、パン屋という建物の中にいるか外にいるかで、キャラクターの性的指向が分かれている。結婚式に参列することなくパン屋の外にいるダンブルドアは、先述しているように物語を通して同性愛者である。そしてパン屋の中にいるキャラクターたちは、ニュートとティナのカップル、ジェイコブとクイニーのカップル、テセウスは過去に女性キャラクターと結婚をしているように、異性愛者と考えられる。

そして1章で先述したように20世紀イギリス社会では、同性愛者が特殊な存在として区別された歴史がある。同性に惹かれるという現象が性科学的に認識されたことで、同性愛者は異性愛者とは異なるという新たな偏見が生まれてしまった。同性愛者を他者的な存在として異性愛者から遠ざけたという歴史は、まさに作中で同性愛者であるダンブルドアが、異性愛者たちの空間であるパン屋の外側にいるという描写に反映され、同性愛者がジェンダー的観点で異性愛とは異なる分類をされたことを表現していると考えられる。そして異性愛者側であり建物の内側にいたニュートが、外側にいるダンブルドアに話しかけに来る描写が続くのだが、その途中でクイニーがニュートに呼びかける(ローリング クロウブス 275-276)。建物を境界として同性愛者、異性愛者を線引きしているという考察を元にすれば、この一連の描写は性的カテゴリーという分類のもと、異性愛者が同性愛に対する交わりを避けているという解釈ができるのではないかと考える。

またパン屋という境界線から分かる、情景の対照的な表現からも同性愛と異性愛の区別という点を指摘できる。「コワルスキーのパン屋の窓に 明かりが点いて温かく輝いている」(ローリング クロウブス 268)と、異性愛者がいる空間は明るく華やかな表現をしている。しかし一方でダンブルドアが最後に歩き出す情景に対しては、「うっすらと雪の積もった通りを、遠くに見える寒々とした地平線に向かって、ただ一人、大きな足取りで」(ローリング クロウブス 279)と暗く質素な表現をしている。この対照的な描写からも同性愛と異性愛は明確に区別されていることが示唆され、また同性愛に対

して孤独や孤立と捉えていた 20 世紀半ばのイギリス社会が背景にあると考える。

このように物語終盤には、華やかで暖かい空間にはニュートをはじめとする異性愛者たちが描かれ、暗く寒々とした空間にはダンブルドアただ一人の同性愛者が描かれていることで、性的な分類が明確に表現されている。そしてこの描写から、20 世紀の同性愛者としての孤独さが強調され、異性愛者と同性愛者の間に存在したセクシュアリティによる他者的な境界線が読み取れると考察した。

### 同性愛者としての後悔

こうして『ダンブルドアの秘密』では、ダンブルドアの台詞や彼をとりまく描写によって、作品と 20 世紀イギリス同性愛の歴史との関連性について考察することができた。そしてそこから、さらに 1 点発展して考えられることがある。それは、作品に同性愛を示唆させる描写またその描写から 20 世紀イギリス社会での男性同士の同性愛を表現することには、アルバス・ダンブルドアが『ファンタスティック・ビースト』シリーズを通して抱えている罪の意識や後悔をより強調させているのではないかということだ。

ダンブルドアが抱え、縛られているものとは、妹アリアナの死という彼の家族にまつわる過去である（菱田 178-179）。若き日に似たような境遇のもとゴドリックの谷<sup>6</sup>で、ダンブルドアはグリンデルバルトと出会いそして意気投合、マグルを魔法で支配し新たな世界をつくるという計画を立てた。この計画をめぐって、ダンブルドアの弟であるアバーフォース、グリンデルバルト、ダンブルドアは三つ巴になって争い、そこに止めに入ったアリアナは三人のうち誰かの魔法によって死んでしまう。この事件をきっかけにダンブルドアはグリンデルバルトと決別する。そして『ダンブルドアの秘密』では、妹の死について涙ながらニュートに語るシーン（ローリング クロウブス 192-197）の後に、ニュートが「完全な善人なんてめったにいない。でも、過ちを犯しても、どんなひどいことをしても、やり直す努力はできる。大事なのはその努力です」（ローリング クロウブス 196-197）とダンブルドアを慰める描写がある。常に冷静なダンブルドアが涙ながらに語り、教え子に慰めの言葉をもらう様子は、妹の死に対して彼が非常に後悔していることが読み取れる。

これまで先述してきたようにダンブルドア自身や彼の周囲のキャラクターたちのセリフなどから、同性愛的に解釈できる描写が存在した。また同性愛者としてのダンブルドアが孤独であり、他のキャラクターからの視点で同性愛について触れがたい様子が 20 世紀的な解釈ができると考察した。そしてこれらの描写や解釈があることで、シリーズを通してダンブルドアが抱えた後悔や罪は、妹を失ったということだけではないという可能性が考えられる。1 章で述べたようにイギリス社会では同性愛に対して、犯罪

や性的墮落という認識が長年存在した。そのため同性愛に関する取り締まりや法律の根本には、同性愛＝罪という意識が大きく影響したと明らかになった。そして『ファンタスティック・ビースト』の時代設定としてはシリーズ 1 作目の 1926 年から、5 作目の 1945 年までを描く予定である。そして実際のイギリス社会では 1930 年代に同性愛への概念は普及するも、1967 年まで合法化されていない（三田 114）。つまりシリーズを通して作品内では、同性愛＝罪という意識が残っている社会を描いているため、ダンブルドアが感じる罪はグリンデルバルトへの恋心としても解釈できるだろう。同性愛描写がなく妹を失ったという事実だけであつたら、グリンデルバルトと戦わないという誓いを無視して彼を倒す展開があつたのでないか。またダンブルドアはグリンデルバルトへの情けなどなく、妹に対する罪悪感だけを背負っている展開になつたのではないか。だが、ダンブルドアはグリンデルバルトと戦うことを極力避けている。つまり彼との関係に対してダンブルドア自身が引け目を感じているように、妹の死に加えて、罪は二重になっているのである。よって同性を愛したという悔いや罪の意識が示唆される描写があることによって、シリーズの中でダンブルドアが抱える罪の重さをより強調していると考察する。

以上、2 章では『ファンタスティック・ビースト』シリーズにおけるアルバス・ダンブルドアについて、イギリス同性愛の歴史との関連に基づき同性愛的解釈を示唆することについて考察してきた。そして主に『ダンブルドアの秘密』では時代設定にもあるように、20 世紀初期の同性愛に対するイギリスの姿勢が反映されていた。具体的には、同性愛に対する消極的な態度や、同性愛者の孤立、また孤立に基づく同性愛者としての線引きが示唆され、当時の捉え方や認識が表現されていると考察した。またそれらの描写があることで、シリーズを通してダンブルドアが抱える後悔には、家族にまつわることだけではなく、同性愛者としての罪の意識があるという解釈の可能性を発展させられると考えた。

また『ファンタスティック・ビースト』シリーズは 2023 年現在、3 作目までしか公開されておらず、物語は完結していない。そのため、菱田（181-182）も男性同性愛を示唆する設定や描写、ダンブルドアはゲイだという 2007 年のローリングの発言は作品に新たな解釈を生むと述べているように、今後の作品の展開によってさらに多様な考察が可能になるといえるだろう。そのため 3 作目までは、20 世紀初期的な同性愛への捉え方が作品に反映されており、ダンブルドアは同性愛者としての罪を感じているという考察で、本稿ではとどめておきたい。

そして次の第 3 章では、比較として『ハリー・ポッター』シリーズにおけるダンブルドアの立ち位置が、イギリス同性愛の歴史とどのような関係があるのかについて、考察

していきたい。

### 第3章 『ハリー・ポッター』のダンブルドアとイギリス同性愛の歴史との関係

次に、『ハリー・ポッター』シリーズにおけるダンブルドアがイギリス同性愛の歴史とどのような関係があるのかについて考えていきたい。2章で考察してきた『ファンタスティック・ビースト』シリーズでのダンブルドアは、同性愛が認識され始めた20世紀の同性愛者として描かれていた。そして3章で述べる『ハリー・ポッター』シリーズのダンブルドアは、19世紀イギリスの同性愛に対する捉え方が関係していると考えられる。そしてそこには成人男性と青年の親密な関係について、19世紀に基づく同性愛としての解釈ができるのではないか。

#### ハリーとダンブルドアの関係

『ハリー・ポッター』シリーズは主人公であるハリー・ポッターと、宿敵であり闇の魔法使いのヴォルデモートとの戦いを描いた物語である。ダンブルドアはホグワーツ魔法学校の校長として登場し、『ハリー・ポッター』シリーズでも中心人物として描かれている。そこで焦点を当ててきたいのは、ハリーとダンブルドアの関係性についてである。ダンブルドアはハリーが、ヴォルデモートによって殺害された教え子ジェームズとリリーの子供であることから、シリーズを通して常にハリーのことを気にかける。またハリーもダンブルドアに対して厚い信頼を持っている。このハリーとダンブルドアの関係は、青年と成人男性の関係という19世紀的な同性愛と関連していると解釈ができるのではないか。

まず、ダンブルドアとハリーの関係性について作中の描写を基に考察していきたい。ダンブルドアは『ハリー・ポッター』シリーズでは、偉大な魔法使いであり、また何でも知っている神のような存在である（藤城 25-29）。そのためホグワーツ魔法学校の生徒を優しく見守るのだが、なかでもハリーのことは誰よりも気かけ、特別な感情を抱いているといえる。『不死鳥の騎士団 下巻』では、ダンブルドアがハリーに対して、「君をあまりにも愛おしく思いすぎたのじゃ」（ローリング 668）という台詞があるように、ダンブルドア自身もこの点について自覚があるように描かれている。またハリーに対する特別な扱いや関係は、ハリーの親友であるロンとダンブルドアの関係性と比較するとより分かりやすい。シリーズ最終章『死の秘宝 上巻』でダンブルドアの死後、彼の遺贈品を受け取る際に、ロンは自分にも遺贈品があることに対してとても驚く描写や（ローリング 179）、その後「ハリーの知る限り、ロンとダンブルドアは、一度も二人きりになったことはないし、直接の接触もなきに等しかった」（ローリング 179）とハリーが思う描写が続く。ロンはハリーと親友であり常に

隣にいたにも関わらず、ダンブルドアとの直接的な接触がないというのは、どれだけダンブルドアがハリーを気にかけ、特別に扱っていたかが分かるだろう。

そしてハリー自身もダンブルドアに対しては強い思いがある。『死の秘宝 上巻』では、ダンブルドアとグリンデルバルトが親しくなりマグルへの支配について二人で夢中になっていた過去を、「アルバス・ダンブルドアの真っ白な人生と真っ赤な嘘」という作中に登場する本を読み、その事実をハリーが知った際に、ハリーは激しく取り乱す。その場に一緒にいたハーマイオニーがハリーを次のように声をかける。

「ハリー、言わせてもらうわ。あなたがそんなに怒っている本当の理由は、ここに書かれていることを、ダンブルドア自身が、いっさいあなたに話さなかったからだと思うわ」「そうかもしれないさ！」ハリーは叫んだ。そして両腕で頭を抱え込んだ。怒りを抑えようとしているのか、それとも失望の重さから自らを護ろうとしているのか、自分にもわからなかった。（ローリング 527）

この描写から、ハリーがダンブルドアについて自分が知らなかった過去があったという事実に対して、彼は非常に動揺していることが読み取れる。またハーマイオニーがハリーを宥める描写は続く。

「ダンブルドアはあなたのことを愛していたわ」ハーマイオニーが囁くように言った。「私にはそれがわかるの」ハリーは両腕を頭から離した。「ハーマイオニー、ダンブルドアが誰のことを愛していたのか、僕にはわからない。でも僕のことじゃない。愛なんじゃない。こんなめちゃくちゃな状態に僕を置き去りにして。ダンブルドアは、僕なんかよりゲラート・グリンデルバルドに、よっぽど多く、本当の考えを話していたんだ」（ローリング 527-528）

このように、グリンデルバルドに対して嫉妬とも読み取れるようなハリーの様子が描かれている。ダンブルドアについて、自分が知らないことがあったこと、また自分にはすべてを話さずグリンデルバルドには話していたということに対して、怒りや嫉妬で取り乱すハリーの描写から、ハリーはダンブルドアに対して教師としての信頼を超えた思いがあったのではないかと考える。

そしてこのようにハリーとダンブルドアの関係は特別なものだということが考えられるが、これは師弟関係としての絆の強さとしてだけではなく、同性愛的な視点でも

見ることができるのではないか。菱田はダンブルドアがハリーを必要に気にかけることについて、どこか度を越したものがあり、ダンブルドアが同性愛者として考えればハリーへの態度はすっきりと同性愛的に解釈できると述べている（162）。そして二人の関係を同性愛的にみたとき、そこには19世紀の同性愛の捉え方と重なる部分があると考えられる。それは成人男性と青年の親密な関係性という点である。1章で先述したように、19世紀の同性愛は売春問題が背景にあったことで上層階級の成人男性の性的墮落として捉えられており、さらに成人男性たちには、少年や青年を墮落の道に導く危険性があったと考えられていた。よって成人男性であるダンブルドアと、シリーズを通して少年から青年へと成長するハリーの親密な関係には、19世紀イギリスでの男性同士の親密な関係が反映されていると考察する。

### 上層階級者としてのダンブルドア

そして、ダンブルドアとハリーの関係が19世紀的な同性愛だという解釈のなかで、ダンブルドアが上層階級の貴族として描かれているという点も、根拠の一つとして挙げられるのではないか。

ダンブルドアは『ハリー・ポッター』シリーズで、貴族として描かれている。最も偉大な魔法使い、ホグワーツ魔法学校の校長などの肩書や華麗な経歴、その他優雅な趣味を持っているという姿は、ヨーロッパの階級の高い男性を連想させる（藤城140）。またダンブルドアは物語のなかでも常に冷静で、取り乱すことはない。教師として生徒をきつく怒鳴ることはなく、静かに見守り、その都度ハリー達が求めていることを助言してくれる存在である。藤城はさらにこのような姿から、「ダンブルドアが表しているのは、古きよき時代の英国貴族ではないだろうか」と述べている（141）。そして1章で先述したように19世紀のイギリス同性愛は、上層階級の男性が主に関連している。階級の高い男性が性的に墮落した結果として、男性同士の親密さを問題視されていた。

故にダンブルドアが貴族として描かれていることで、彼がハリーという青年に影響を及ぼす年上の上層階級の男性であることが強調され、『ハリー・ポッター』シリーズ内でのダンブルドアの立ち位置が、階級の高い男性の性的墮落という19世紀同性愛の歴史との関連性を裏付けているひとつだと考察する。

### 『ファンタスティック・ビースト』シリーズと『ハリー・ポッター』シリーズの時代的な差異

このように『ハリー・ポッター』シリーズでダンブルドアとハリーの関係に着目すると、上層階級の成人男性と青年という関係性が浮かび上がり、そこには19世紀的な歴史が表現されていると述べてきた。しかし、2章で述べた『ファンタスティック・ビースト』シリーズの時代設定は、1926年から1945年である。対して『ハリー・ポッター』シリーズは、その後の1980年代から2000年が設定されている。ここで各作品の時代設定と、本稿の2章と3章での考察とでは、時代的な差異が生じる。『ハリー・ポッター』シリーズは、『ファンタスティック・ビースト』シリーズの約40-50年後である20世紀が設定された物語であるのに、本章では19世紀的な歴史が反映されていると考察した。一方で『ファンタスティック・ビースト』シリーズでは20世紀初期から中期が反映されており、『ハリー・ポッター』シリーズと時代が前後している。なぜ、このように作品に反映される時代が前後しているのか。それは『ハリー・ポッター』シリーズが表す社会の特徴が影響していると考えられる。

『ハリー・ポッター』シリーズは20世紀を舞台とする物語であるが、古典的なイギリス社会を表しているという特徴がある。先述したダンブルドアが古き英国貴族として描かれている点や、魔法族出身かマグル出身かで差別される描写による階級の意識という点などから、作品内の社会は現代的とは言えないだろう。坂田は、ハリーを敵対し魔法族出身である同級生のマルフォイが感じる、マグル出身ながら成績優秀なハーマイオニーに対する嫌悪感は、産業革命後19世紀のヴィクトリア朝社会の中でイギリス貴族たちが中産階級へ感じていた焦燥感と重なると指摘する(115)。このように、『ハリー・ポッター』シリーズは19世紀などの古き英国社会を示唆する部分があるためクィア視点で作品を考えた際にも、セリフや描写から19世紀の同性愛に関する歴史や捉え方が反映されていると考察する。

このように『ファンタスティック・ビースト』シリーズと『ハリー・ポッター』シリーズにおける考察の中での、時代的な差異について考えた。そこには『ハリー・ポッター』が描く社会の特徴が影響していた。時代設定は20世紀後半であるものの、古き貴族の姿や階級の差が表現されていることで、『ハリー・ポッター』シリーズが伝統を重んじる19世紀的なイギリス社会を描いているということが分かった。そのため男性同士の関係の描写に着目してみても、そこには『ファンタスティック・ビースト』シリーズよりも古い価値観や歴史が作品に反映されていると分析した。

### ダンブルドアがハリーに与えた影響

ここまで、ダンブルドアとハリーの関係性は上層階級者が青年を性的に墮落させる、19世紀的な同性愛と関連があるということについて述べてきた。しかし、いくら

二人の関係が 19 世紀的な視点から捉えられるとしても、実際に作中で売春など性的な描写が出てくるわけではない。そこで、19 世紀成人男性が青年を墮落させる危険性があったという点との関連については、ヴォルデモートを倒すために、ダンブルドアがハリーを危険な目に合わせたという点から考えていきたい。

『ハリー・ポッター』シリーズの初期は、ハリーがハーマイオニーやロンと共に、自ら行動を起こして危険な場面に直面している。しかしシリーズの中間に入ると、ヴォルデモートから世界を救うにはハリーが必要であるためダンブルドアは、ハリーに仕事を頼むようになる。その仕事が、命に関わるようなものであり、ハリーは何度も危険な場面に直面する。そして『死の秘宝 下巻』でダンブルドアの死後、彼の弟であるアバーフォースがハリーに対して警告する描写がある。

「つまり……ダンブルドアは僕に仕事を遣しました」「へえ、そうかね？」アバーフォースが言った。「いい仕事だといいが？楽しい仕事か？簡単か？半人前の魔法使いの小僧が、あまり無理せずに見えるような仕事だろうな？（中略）  
「でも、僕には義務がー」「『義務』？どうして『義務』なんだ？兄は死んでいる。そうだろうが？」アバーフォースが荒々しく言った。「忘れるんだ。いいか、兄と同じところに行っちゃう前に！自分を救うんだ！」（ローリング 258)

このようにアバーフォースが、ハリーを止めていることが読み取れる。アバーフォースが言うように、ダンブルドアはハリーという十分に成熟していない青年に危険な仕事を託している。このような点から、ダンブルドアがハリーにこだわり危険をもたらす成人男性というような解釈ができると考える。菱田も『ハリー・ポッター』シリーズをクィア視点で見ると、同性愛者であるダンブルドアが気にかけていた男のひとりとしてハリーを挙げ、そしてハリーへの執着心が対ヴォルデモート作戦に危険性をもたらしたと指摘している（166-167）。

また、「兄と同じところに行っちゃう前に！」という台詞からは、同性愛的な視点では死以外の他の解釈ができるのではないか。ダンブルドアの死後の会話であるため本来であれば、これ以上危険を冒すとダンブルドアと同じようにハリーが死んでしまうということをアバーフォースが警告していると読み取れる。だが同性愛的な視点で見ると、＜同じところ＞という場所を、同性愛者として墮落した人間のいく場所として解釈できると考える。1 章で先述したように同性愛とは 16 世紀から 18 世紀頃、道を踏み外した状態として捉えられた歴史があった。また 19 世紀には上層階級の成人男性

の性的墮落として考えられており、成人男性が青年たちと親密な関係になることで彼らを同じく墮落の道へ導くという捉え方があった。そのため、『ハリー・ポッター』シリーズで青年のハリーが、上層階級男性であるダンブルドアを慕う姿の先には、ダンブルドアと同じように道を踏み外す可能性があること、アバーフォースは心配していたのではないかと推測される。またこのセリフで明確に「死」という言葉が使われているのではなく、「同じところ」という曖昧な表現である点からも、同性愛者として墮落した側へ行ってしまふ危険性を警告していると考察する。

よって実際に作中でハリーとダンブルドアの間で性愛に関する描写はなく、ダンブルドアがハリーに性的な意味合いで危険を与えていたとはいえない。しかし、ハリーがヴォルデモートを倒すためダンブルドアによって課せられたリスクのある仕事や戦いという危険性を、19世紀的な成人男性が青年にもたらす危険と重ねられると考察する。

以上、3章として『ハリー・ポッター』シリーズにおけるダンブルドアの立ち位置とイギリス同性愛の歴史との関連について考察してきた。特にダンブルドアとハリーの関係性に注目することで、19世紀のイギリス社会で存在した同性愛の捉え方が反映されている。それは、上層階級の成人男性と青年の親密な関係という点である。実際にダンブルドアは、階級の高い典型的な英国貴族として描かれている。そして上層階級に位置する彼が青年であるハリーを、他の生徒以上に気にかける。同時にハリーもダンブルドアへの信頼は厚く、ダンブルドアについてこれまで知らなかった過去を知った時には激しく取り乱し、教師に向ける以上の想いがあると読み取れる。そしてこのように彼らが特別な関係であること、またダンブルドアが同性愛者であるということとを考慮すると、この関係は19世紀におけるイギリスの同性愛に関する捉え方であると解釈できる。そして、『ハリー・ポッター』シリーズが19世紀の古典的なイギリス社会を表しているという点が、この解釈や考察により影響を与えているとも考察した。

## 結論

本稿では、『ハリー・ポッター』また『ファンタスティック・ビースト』シリーズにおいて中心キャラクターである、アルバス・ダンブルドアを取り巻く描写とイギリス同性愛の関連について考えてきた。

1章では18世紀から20世紀のイギリス同性愛の歴史について述べた。イギリスでは1533年ソドミー法として男性同士での性行為が禁じられてから、18世紀、19世紀までは同性愛は人間の墮落として捉えられており、特に19世紀は売春問題やラブシェール修正条項の曖昧さから、同性愛とは上層階級の成人男性の墮落として考えられた。20世紀に入ると性科学的に同性に惹かれる現象を同性愛として定義され始め、同性愛者は異性愛者とは線引きされるようになる。このように18世紀から20世紀中期頃までイギリスは同性愛に対して、罪や墮落、また特殊な存在だと厳しい規制や偏見をもった歴史があった。

そして2章では『ファンタスティック・ビースト』シリーズにおけるダンブルドアの同性愛者としての描写を、考察をしたことで、20世紀的な同性愛の捉え方がそこには反映されていると考えた。そしてダンブルドアの同性愛描写があることで、シリーズを通して彼が抱える罪の意識が、同性愛者としての罪とも重なり強調されていると考察した。

3章では『ハリー・ポッター』シリーズにおける、同じくダンブルドアの同性愛的な描写について考察をしてきた。ハリーとダンブルドアの親密な関係に焦点を当てることで、青年と上層階級の成人男性という19世紀同性愛の歴史との関連性が考えられた。階級の高い英国貴族として描かれるダンブルドアが、未成熟な青年ハリーを特に気かけ、危険な戦いに参加させる様子は、19世紀のイギリスでの同性愛の捉え方と重なると考察した。

このように『ハリー・ポッター』シリーズ、『ファンタスティック・ビースト』シリーズはファンタジー作品であるが、作品内の男性キャラクター同士の関係やダンブルドアの孤独を、クィア視点で見ていくとそこには、同性愛とは罪であるというイギリス社会にあった意識や、成人男性が青年を性的墮落へ導くこと、また同性愛への消極的な態度というように、これまでイギリスが歩んできた同性愛に対する捉え方の歴史が反映されていると考えることができた。

現在の段階では『ファンタスティック・ビースト』シリーズにおいて、ダンブルドアがグリンデルバルトへの想いを告白する描写は描かれたが、グリンデルバルトがダンブルドアに対しての心情が明確とは言えない。そして『ファンタスティック・ビー

スト』シリーズは、今後2作品続いていく予定だ。そのため今後の展望としては、これから続く2作品内でグリンデルバルトが抱くダンブルドアへの感情が描かれることで、彼らの関係性がより明確になり『ファンタスティック・ビースト』がファンタジー作品としてだけでなく、クィア視点での多様な解釈がさらに生まれていくことである。

## 注

1. 18世紀半ばにロンドンのクリーブランド街一番地に男娼宿が開かれたがそこで働いていたのは電報配達少年たちであった。ある日彼らのひとりが分不相応の金を持ち歩いていたことにより男娼宿の存在が判明し、関係者は有罪判決を受けたが、その顧客が王室関係者を含む上層階級者であった（野田 2004 228）。
2. ヘンリー・ハヴロック・エリス（1859-1939）、イギリスの医師であり性科学者。ジョン・アディントン・シモンズ（1840-1893）、イギリスの文人であるも高い性科学の知見をもっていた。エドワード・カーペンター（1844-1929）、イギリスの詩人、エリスとシモンズの同性愛に関する共同研究書『性的倒錯』に自伝的症状の提供（宮崎 135）。
3. オスカー・ワイルド（1854-1900）英国の詩人・劇作家・小説家。（デジタル大辞泉）
4. 魔法契約の一つで、互いに誓った事柄への契約。
5. 魔力を持たない人間。
6. ダブルドアの故郷であり、グリンデルバルトと出会った村。

## 引用文献

Hetter, Katia “J.K. Rowling’s Reply to Critic of Gay Dumbledore.” CNN. March 25, 2015.

[www.cnn.com/2015/03/25/entertainment/feat-rowling-dumbledore-gay-tweet/index.html](http://www.cnn.com/2015/03/25/entertainment/feat-rowling-dumbledore-gay-tweet/index.html)

「異性カップルもシビル・パートナーシップ制度を選べるように 英国」BBC News Japan、2018年10月5日。[www.bbc.com/japanese/45743677](http://www.bbc.com/japanese/45743677)

板倉巖一朗『大学で読むハリー・ポッター』 松柏社、2012年。

一般財団法人 日本聖書協会「ローマの信徒への手紙」『新約聖書』

[www.bible.or.jp/read/vers\\_search/titlechapter.html](http://www.bible.or.jp/read/vers_search/titlechapter.html)

ウィークス、ジェフリー、赤川学 監訳『われら勝ち得し世界—セクシュアリティの歴史と親密性の倫理』弘文堂、2015年。

北丸雄二「同性婚」、『日本大百科全書』、『ジャパナレッジ』2022年。

<https://japanknowledgecom.jras.jissen.ac.jp:2443/lib/display/?kw=%E3%82%BD%E3%83%89%E3%83%9F%E3%83%BC%E6%B3%95&lid=1001000330948>

坂田薫子「マグルの階級と魔法界の階級『ハリー・ポッター』のイギリス」『ユリイカ特集『ファンタスティック・ビースト』と『ハリー・ポッター』の世界—J.K.ローリ

- ングの魔法とファンタジー』第47巻第18号12月号、2016年、pp. 112-119。
- 「ソドミー」『デジタル大辞泉』小学館『ジャパンナレッジ』<https://japanknowledge-com.jras.jissen.ac.jp:2443/lib/display/?ph=1&kw=%E3%82%BD%E3%83%89%E3%83%9F%E3%83%BC&lid=2001010971900>
- 立石弘道「同性愛・文学・法—抑圧と解放」『現代イギリス文学と同性愛』二十世紀英文学研究会、金星堂、1996年、pp. 1-36。
- 野田恵子「十九世紀イギリスにおけるセクシュアリティの政治学—「社会純潔運動」と傾向改正法の成立をめぐって—」『現代社会理論研究』第14号、2004年、pp. 218-229。
- . 「十九世紀末イギリスにおける性と愛—「オスカー・ワイルド事件」の歴史的位相とその効果—」『ソシオロギス』第29号、2005年、pp. 127-146。
- . 「イギリスにおける「同性愛」の脱犯罪化とその歴史的背景—刑法改正法と性犯罪法の狭間で—」『ジェンダー史学』第2号、2006年、pp. 63-76。
- . 「「同性愛」と「寛容な社会」—解放と容認の時代？」
- 川端康雄 他編『愛と戦いのイギリス文化史』慶應義塾大学出版会、2011年、pp. 203-217。
- 菱田信彦『解説「ハリー・ポッター」ハーマイオニーとロンの結婚をめぐるローリングの“後悔”とは』小鳥遊書房、2022年。
- 福井令恵「北アイルランドの性的マイノリティをめぐるポリティクス」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第20号、2023年、pp. 57-73。
- ブレイ、アラン『同性愛の社会史—イギリス・ルネサンス』田口孝夫・山本雅男 訳 彩流社、1993年。
- ブレディ、ショーン「近代イギリスにおける第一次世界大戦以前の男性性と男性同性愛の問題」『ジェンダー史学』野末紀之 訳、第4号、2008年、pp. 69-86。
- 三田紗央里「二重のアイデンティティ：20世紀英国における男性同性愛者とスパイ」『れにくさ』第9号、2019年、pp. 113-128。
- 宮崎かすみ「エドワード・カーペンターの同性愛思想—ジョン・アディントン・シモンズとの関わりから」『和光大学表現学部紀要』18号、2018年、pp. 131-152。
- ローリング、J・K『ハリー・ポッターと死の秘宝上巻』松岡佑子 訳、静山社、2008年。
- . 『ハリー・ポッターと死の秘宝下巻』松岡佑子訳、静山社、2008年。
- . 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団下巻』松岡佑子訳、静山社、2020年。
- ローリング、J・K、クローブス、スティーブ『ファンタスティック・ビーストとダンブルドアの秘密 映画オリジナル脚本版』松岡佑子訳、静山社、2022年。

「ワイルド」『デジタル大辞泉』小学館『ジャパンナレッジ』 <https://japanknowledge-com.jras.jissen.ac.jp:2443/lib/display/?lid=2001019752600>